

## 令和五年度徳島文理中学校後期入学試験問題

## 第一限

## 国語

(その一)

注意 解答欄は問題用紙の(その六)・(その七)にあります。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① 比喩はことばの飾りではなく、乱れてよじれて苦しむ心に一条の光を差し向けます。

具体例をあげましょう。仲間はずれになったことはないですか。幼いころはわりと簡単に片づくことが多いでしょうが、成長するにつれてこじれる場合がありますね。心の大きな傷として残る場合も。次の引用は村上春樹の『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』(二〇一五年)からです。高校から大学にかけて仲のよかった特別な五人組から、ただひとり理由も知らされずにはずされてしまった多崎つくるとが心境を語る場面です。元のグループのひとりと時を経てようやく再会して――「どう言えばいいんだろう、まるで航行している船のデッキから夜の海に、突然一人で放り出されたような気分だった」と。村上には比喩の名手です。一般に一流の作家は時代の問題と向きあって、それにことばを与える役目を引き受けます。とくに村上の作品には、悩みを抱える若者の心に灯火を点じて、出口のありかを照らそうとするものが目立たないでしょうか。引用を続けます。船の比喩の展開をみてください。

「……」彼は一息置いて続けた。

「誰かに突き落とされたのか、それとも自分で勝手に落ちたのか、そのへんの事情はわからない。でもとにかく船は進み続け、僕は暗く冷たい水の中から、デッキの明かりがどんどん遠ざかっていくのを眺めている。船上の誰も船客も船員も、僕が海に落ちたことを知らない。まわりにはつかまるものもない、そのときの恐怖心を僕は今でも持ち続けている。自分の存在が出し抜けに否定され、身に覚えもないまま、一人で夜の海に放り出されることに対する怯えだよ。たぶんそのために僕は人と深いところで関われないようになってしまったんだろう。他人との間に常に一定のスペースを置くようになった」(同)

どうでしょう。比喩は、問題に形を与えて明確な思考への糸口を示します。比喩が形を与えるとは、曖昧模糊とした状況――多崎つくるとの場合なら心の深い傷――をことばで造形し、表現することによって問題の輪郭をはっきりさせることです。

ただ比喩にもいくつかの種類があります。最初の引用「……ような気分だった」は、「ような」によってここに比喩があることを直接示すので直喩(シミリー)と呼ばれます。だけどこれだけではこの比喩がまだしつかりと理解されないかもしれない。そこで次の引用でさらに詳しい説明を加えます。

これは新鮮な直喩のふつうの姿で、一般的な形に直すと「AはBのようだ、Cの点で」となるでしょう。CはBの比喩のネタをばらします。鮮度の高い直喩はしばしばCによるネタばらしがないと十分な理解がえられないからです。

もうひとつ別の作品の例をみましょう。天吾は週に三回予備校で数学を教えて、そのほかの時間はまだ世に出ない作家として文章をせっせと綴ります。ときどき仕事をまわしてくれる編集者の小松から電話がかかるのですが、それが無神経にも夜中なんかに。

「……」真夜中に電話をかけてくるのはお願いだからやめてほしいと、はつきり頼んだ。収穫前にイナゴの群れを畑に送りつけなくてくれと、神さまにお願いする農夫のように。(村上春樹『1Q84 BOOK1』二〇一二年)

受験	番号

# 令和五年度徳島文理中学校後期入学試験問題

## 第一限 国 語

(その 一)

このような斬新な比喻はおそらくはじめて目にするでしょう。読者にとってはじめてだけでなく、作家にとっても後にも先にも使ったことのない表現です。そして直喩の真価はここにあります。つまり空前絶後、唯一無二の比喻であること。これに文脈的に適切という条件を加えさせてください。たんに珍しければいいというのではありませんから。よくぞことばにしてくれた、言い得て妙、と喝采の拍手を送りたくなる、そのようなクリエイティブな比喻が直喩の真骨頂です。

(瀬戸賢一「比喻の歌を聴け」)

問一 筆者が傍線部①のように述べているのはなぜか、答えなさい。

問二 傍線部②「一般的な形に直すと『AはBのようだ、Cの点で』となるでしょう。CはBの比喻のネタをばらします」とありますが、次の各問いに答えなさい。(句読点なども文字数に数えます。以下同じ。)

1 『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』の例から「A」とは何かを、本文中の語句を用いて六十字以内で答えなさい。また、「B」とは何かを、本文中の語句を用いて三十五字以内で答えなさい。

2 『1Q84 BOOK1』の例では、「A」は「真夜中に電話をかけてくるのをやめてほしいと強く願っている天吾」ですが、「B」とは何かを、抜き出して書きなさい。また、「C」とはどういうことかを、考えて書きなさい。

令和五年度徳島文理中学校後期入学試験問題  
第一限 国語

(その二)

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

文吉は、腕組みをしたまま仕事場にぼつねんと座っている。

もう三日も、そうやって座っている。

目の前に八寸ほどのひのきの古材が置いてあり、そばには、研ぎ上がったノミが並べてある。そのノミを取ってひのきに向かえばいいのだが、いつこうに手が出ない。「ぬすびと」の面が打てないのだ。

① この春、壬生の大念仏で、「山端とろろ」という狂言を新しく演じる。その狂言に使うぬすびとの面が、どうにも打てない。文吉は、能面を作る面打ち師だ。

能面は、新しい顔の面を作るのではなく、これまでに使われてきた古い能面をそのまま写し取るように彫っていく。

そっくり同じであればあるほど、面打ち師の腕がいいことになる。

たまに狂言の面を打つこともあるが、やっぱり決まった顔の古い手本があり、それと同じものを彫ればよい。

ところが、ぬすびとの面というのは、能面にも狂言面にもない。

まだ、誰も打つことがないのだ。

眉をぐいと寄せ口をうむと引き結んだ能面や、わに口を横に開いてすこみのある目でにらんでいる狂言面など、ぬすびとらしい面があるにはあるが、「山端とろろ」で使うにはふさわしくない。(中略)

彫る顔が自分の頭の中にはつきり焼きつかない限り、ノミのひと打ちさえできない。

でき上がった面の形や色、表情の細かいところまで思い浮かべることができるようになってこそ、初めてノミを下ろせる。

文吉は、面打ち師としてまだ若い方だが、打つ面の評判が良く、自分でもやっと自信が出てきたところだ。名高い人々に少しでも近づこうと、懸命に励んでいる。

ところが、軽い気持ちで引き受けたぬすびと面がなかなか打てない。

約束の日が近づいたので、「さっさとやっってしまうおう。」と木取りをしてノミを並べてみたが、そのまま一步も進まない。

手本のない面を打つことが、これほどしんどいとは思わなかった。よっぽど投げ出してしまおうかとさえ考えたが、面打ち師の意地がそれを許さなかった。

それに、このしんどさを抜け出ることができたら、何か新しいものがつかめるような感じが、かすかにあった。(中略)

※ おふじが戸締まりを確かめて戻りかけると、忙しく戸をたたたく音がした。

「今頃誰やる？」

すぐには戸を開けず、閉めたままできた。

「どなたはんでっしゃろ。」

すると、男の低い声が慌てたように早口で答えた。

「開けてください、助けてください！」

助けてください——という言葉に、おふじは迷わず戸を開けた。

とたんに、ぬつと背の高い男が入ってきて、後ろ手で戸を閉めた。

薄暗がりの中で、男の手にぎらつと刃物が光った。

「きやつ、ぬすつとや！」

おふじは、下駄をはね散らして仕事場へ飛び上がり、文吉の背中にしがみついた。

ぬすつとが、低いおどろおどろした声で言った。

## 令和五年度徳島文理中学校後期入学試験問題

## 第一限

## 国語

(その四)

「騒ぐな。」

文吉は、体がすくんで何もできなかった。ノミを使ってるから刃物には慣れてるはずなのに、気持ちが悪転してしまつて、どうすればいいか分からなかった。

「座れ！」

言われたとおりにおふじをかばいながら座つたが、目を刃物から離さなかった。よく切れそうな包丁だった。おふじが「あつ。」と小さく叫んだ。

「赤ちゃん——。」

ぬすつとの背中に、おふいひもで赤ん坊が背負われている。

「騒ぐな、子供が起きる。」

ぬすつとは、二人の目の前で包丁を振り回し、床にガツと突き立てると、しゃがんでおふいひもをほどき、器用に赤ん坊を前へ抱き取った。

そして文吉の方へ、ぐいと突き出した。

「取れ。」

文吉は、「えっ。」という顔をしてしりごみをしたが、ぬすつとは、構わず赤ん坊を突き出した。

「はよう、取れ！」

仕方なく文吉がおずおずと手を差し出すと、ぬすつとは、赤ん坊を押しつけるようにして抱かせた。

すると、眠っていた赤ん坊が、「あうん。」とぐずって顔を振った。

すぐにおふじが抱き取ってあやすと、おふじの胸に顔を寄せて、安心したようにまた小さな寝息を立て始めた。それを確かめてから、ぬすつとは床の包丁を抜いて低い声で言った。

「その子を、お前たちの子供として大切に育てろ。もし、捨てたり、ひどい目に遭わせたりした時は、これだ——。」  
ビュツと二人の目の前で包丁が音を立てた。

「たとえわしが獄門台の露と消えようとも、地獄の底からじっと見ているからな。」

ぬすつとは、うむと気張って二人をにらみつけた。

それは、思わず震え上がるような恐ろしい顔だった。

「は、はい。」

慌てて両手について頭を下げたが、次の瞬間、文吉は、はじめたように顔を上げた。そして、ぬすつとの顔を改めてまじまじと見つめた。

ぐいと寄せた太い眉は、先の方がぴんと跳ね上がり、目は天狗のように鋭く光り、たくましい鼻はみごとに盛り上がって横に広がり、引き結んだ大きな口には、すさまじいほどの力強さがみなぎっている。肌の色は日に焼けてあくまで黒い。

それは普通の人間の顔ではなかった。

文吉は、その顔の隅から隅までなめるように見ていった。

すると、うむと気張った恐ろしい顔の裏に、もう一つの別の顔があるような気がしてきた。

反対にこちらから「わあつ。」と脅かしてやると、とたんにふっと吹き出してしまうような、なんとも滑稽でおかしな顔が隠されているような気がした。

これや、この顔や！

## 令和五年度徳島文理中学校後期入学試験問題

## 第一限 国語

(その五)

② 文吉は、ひたとその顔をにらみつけた。

どんな小さな表情の動きも見逃さず、全て盗み取ってしまうかのように――。(中略)

文吉は、もう一度じっくりと、ぬすつとの顔を思い出してみた。

その顔は、思い出しているうちに少しずつ変わっていき、ぬすつとのそれとはやや違うものになっていった。

額は大きく飛び出し、つり上がった眉と眉の間には深く太いしわがくつきりと刻まれ、眉の下には鷹のような鋭い目から

んらんと光っている。鼻は顔の端から端までいっぱい広がり、真一文字に引き結んだ口を盛り上がった顎が支えている。

見るからに恐ろしいが、相手を怖がらせようとして精いっぱい気張っている顔だ。

それは、「山端とろろ」のぬすびと面にびつたり顔に見えた。

文吉は、とりあえず赤ん坊をおふじに任せてノミを握った。

その仕事は楽しかった。

今までは、どちらが手本の面でどちらが文吉の打った面か分からないほど、そっくり同じものを彫ることに喜びを感じていた。

だが、このぬすびと面の場合は違う。

己の頭の中に思い描いた顔を、自由に彫っていくのだ。彫っていくうちに、最初考えたものと少しずつ変わっていった。

その変わっていくのが、「違う、こうや、この方がええ。」というふうに、自分で納得できた。

ノミをどう動かせば力強い線が出るのか、小刀でどう削れば柔らかい線が出せるのかを、自分の手がおもしろいほど覚え込んでくれた。決まりきった動かし方ではなく、自由な使い方することによって、面の表情がどんなに生きてくるかが分かった。

最後に、目と口を丁寧に仕上げ彫り終わった。

(吉橋 通夫 『ぬすびと面』)

※「山端とろろ」・・・狂言の演目の一つ。ある富豪が宿泊している家に、強盗が押し入り、下男がとろろのすりこ木で渡り合

ううち、とろろの鉢がひっくり返り、強盗は足をすべらせて捕まってしまうという滑稽な狂言。

※「おふじ」・・・文吉の妻

問一 傍線部①とあるが、面打ち師の仕事とは、どのようなものか。過去に作った能面がある場合と、ない場合の仕事内容について、それぞれ五十五字前後で説明しなさい。(句読点なども文字数に数えます。以下同じ。)

問二 傍線部②とあるが、この時文吉はどのようなことに気がついたから「にらみつけた」のか。百字以内で書きなさい。

問三 ぬすつとが押し入る前と後では、文吉の仕事に対する思いはどう変化したか。百字以内で書きなさい。